

(係)藤井 午後七時より

山行報告

1929 大源太北沢 (都合中止)

1930 剣岳定着 (夏山合宿)

期日 八月一日(水) 八月八日(水)

参加者 青藤(仰)CL 天野SL 松戸SL 遠山SL 藤井

福島 上野 野村 寺田 長崎 鄭

以上十一名

行動計画

八月一日に入山する先発隊と四日入山の本隊に分けて、先発隊は冬山予定の針ノ木岳西稜取付部の偵察を行なうこととした。

行動としては全般に天候に恵まれず計画の変更を行なっている。実際の行動は報告をみてもらうこととして行動予定をここに載ける。

日程 コース(計画) メンバー

一日(水) 先発入山・偵察 遠山L 福島 上野

二日(木) 針ノ木谷・真砂沢 遠山L 福島 上野

三日(金) Cフェース剣稜会ルート

四日(土) 本峰北壁LII 遠山L 福島 上野

本隊入山 青藤CL 天野SL 松戸SL

藤井 野村 寺田

五日(日) 平蔵谷・本峰・長次郎谷 青藤L 福島

寺田 長崎 鄭

六日(月) ハツ峰上部縦走 藤井L 天野 寺田

七日(火) 長崎 鄭

八日(水) 長崎 鄭

九日(木) 長崎 鄭

十日(金) 長崎 鄭

十一日(土) 長崎 鄭

十二日(日) 長崎 鄭

十三日(月) 長崎 鄭

十四日(火) 長崎 鄭

十五日(水) 長崎 鄭

十六日(木) 長崎 鄭

十七日(金) 長崎 鄭

十八日(土) 長崎 鄭

十九日(日) 長崎 鄭

二十日(月) 長崎 鄭

二十一日(火) 長崎 鄭

二十二日(水) 長崎 鄭

二十三日(木) 長崎 鄭

二十四日(金) 長崎 鄭

二十五日(土) 長崎 鄭

二十六日(日) 長崎 鄭

二十七日(月) 長崎 鄭

二十八日(火) 長崎 鄭

二十九日(水) 長崎 鄭

三十日(木) 長崎 鄭

三十一日(金) 長崎 鄭

八月二日(土) 長崎 鄭

八月三日(日) 長崎 鄭

八月四日(月) 長崎 鄭

八月五日(火) 長崎 鄭

八月六日(水) 長崎 鄭

八月七日(木) 長崎 鄭

八月八日(金) 長崎 鄭

八月九日(土) 長崎 鄭

八月十日(日) 長崎 鄭

八月十一日(月) 長崎 鄭

八月十二日(火) 長崎 鄭

八月十三日(水) 長崎 鄭

八月十四日(木) 長崎 鄭

八月十五日(金) 長崎 鄭

八月十六日(土) 長崎 鄭

八月十七日(日) 長崎 鄭

八月十八日(月) 長崎 鄭

八月十九日(火) 長崎 鄭

八月二十日(水) 長崎 鄭

チンネ中央チムニ 遠山L 野村
下山 松戸L 上野
八日(水) 全員下山 藤井L 福島

報告

☆八月一日(水) 晴

○針の木峠・平の渡・黒四ダム

P 遠山L 福島 上野

早朝、大町で集合、タクシーにて南沢へ入る。大沢小屋を経由して、針の木雪渓を汗とともに登る。振り返ると爺や鹿島槍がよく見える。雪化粧をしていなくても彼らは可愛いやつだ。雪渓も終り峠に着く。今年の冬台宿の時にもこの峠はあった。この小屋の裏でジャンケンに負けたのだ。あの山頂に立てないくやしさが込み上げてくる。だけど今日はちがう。暑くて暑くて、涼しさを求めるが、影もない。山頂へ行きたい気持ちを押えて針の木谷へ下る。出合を右折して南沢の出合へと進む。針の木沢の出合から南沢の出合までは悪路である。ところどころに見えるケルンを頼りに下

る。会う人達のバテた顔々が悪路をいっそう明確にしている。やがて南沢の出合、針の木西稜の取付に出る。対岸の樹林の中に目をやると、赤布がみえる。あれが以前の下の見の時に付けた赤布だろうか。確認しに行くが名前が入っていない。布のまわりをふちどったしっかりした赤布だった。テント設置後偵察をする。この西稜線にも同じ赤布がついていて、冬には登ってやるぞという力がモリモリ湧きでてきた。(上野 忠明)

タイム 扇沢6・20 湧き水7・05 15 雪渓8・00 15 雪渓9・00 30 急登10・00 15 針の木峠10・51 11・35 沢12・30 45 針の木沢出合13・00 1 船達新道取付13・25 45 途中14・30 45 小南沢15・30 45 南沢15・56

☆八月二日(木) 曇

○西稜取付・黒四ダム・室堂・真砂沢

P 遠山L 福島 上野

西稜末端を大高巻きし、左岸に移ると、急に道がよくなる。四五分で平ノ渡に到着。対岸の平ノ小屋は三角屋根のムンディな建物だ。対岸につながれている丁

ムボート風の物を指して、上野があれが渡し舟だと主張し、写真までとるが、やがてこちらからは見えなくなり江から立派な船が現われ、大笑い。
黒四までは長く退屈な道だ。しかし、山々の静まりかえったふん囲気は、いかにも山深い。

黒四から文明社会に逆行し、ケーブル、ロープウェイ、バスと乗りつぐ。ロープウェイの順番待ちをしながら、ソバを食ったり、ジュースを飲んだりしていると、室堂からまた山登りをするのが信じられなくなってしまう。

室堂着一二時四五分。風が強く、寒い。さて、いよいよ剣岳合宿の始まりというわけだ。

雷鳥沢から軽く二ピッチで剣御前小屋に到着するも、期待の剣岳はガスにつつまれて姿を見せない。

いかにも北アルプスのど真中といった感じの剣沢の穂巻地、広大な剣沢雪渓、源治郎尾根の岩肌と、徐々に気持ちの高まりを感じながら、夕刻真砂沢にたどり着く。
（福島 功夫）

タイム 穂巻地5・00―平ノ渡5・45―6・30―黒四ダム10・30―室堂12・45―剣御前小屋15・05―20―

真砂沢穂巻地17・15

☆八月三日(金) 曇

○六峰CフェースRCCルート

P遠山し 福島 上野

合宿の実質的な初日というのに、天気ははっきりしない。しばらくクズクズしていたが、ともかく出かけてみることにする。それでも雪渓をたどるうちに、次第に登る気が出てきた。

六峰下までいくと、取付きでズラリと順番待ちだ。当初登るつもりだった剣岳合宿は切れ目なく人がつなびがっている。比較的すいているRCCルートに向かう。

ランクフルトから階段状の岩場を二〇m登り、ザイルを着ける。1Pは遠山トツアで白いスラブを右にトラバース。2Pから傾斜が強くなり、凹角から右の力ンテに抜ける気分よいよピッチを福島トツアで越える。テラスから下を見ると、白いフェースが雪深まで続いて、とてもきれいだ。とにかくフリクションの良い岩で快適である。

3P目、ハイマツ帯からフェースへ、ここまでが核心のようだ。4P目は傾斜も落ち、ハイマツが目立つ。2m位の岩を越すと、終了だった。

他パーティの登はんぶりを見物しながらのんびりと長次郎雪渓に降り立ち、軽い足どりで穂巻地へ向かう。
（福島 功夫）

タイム 穂巻地6・20―取付9・00―10・00―終了点12・15―50―穂巻地14・50

☆八月四日(土) 雨

○本隊入山(室堂―真砂沢出合)

前夜からの豪雨で、富士山の急行も相当遅れた。全員と荷物が無事に室堂に着いたのは、午前一時を回っていた。観光客でごったがえすバスターミナルを抜け出て、雨の中を歩き始めた時には、なぜかホツとした気持ちだった。雷鳥沢を渡り、剣御前小屋への登りは暑さの大敵にわずらわされずにすんだ為か、かんたんに乗り切ることができた。

風も雨も強い。行く手の剣沢は、ガスの中で見えぬ。ぬれながら、早くも雨具の良し悪しが互いに語り

れる中、小屋の横で小休止をとっていた。その時、見たような顔の男が三人。先発で入山していた三人がサボートに来てくれたのだった。

あいかわらずの雨模様だが、荷も心もちょっと軽くなって、剣沢を下りはじめた。剣沢穂巻地を横切り雪渓の下りになった頃には、やや小雨になっていた。武蔵谷と平蔵谷とを見間違えて、今年は危なそうだなどと余計な心配をしたりもしたが、目はぶっつても、足はスイスイと先へ進んだ。真砂沢出合のキャンプ村は、例によって混雑している様子であったが、我々のテントもなんとか張れたようである。先行きの心配を雨の入山であった。
（天野 一郎）

タイム 室堂11・50―剣御前14・30―55―真砂沢キャンプ場17・15

○本隊入山サボート P遠山し 福島 上野

昨夜からの断続的な雨で、今日は停滯日と決めこんでいたが、本隊の入山が心配になってきたので、昼前に真砂沢を出発した。二ピッチで剣沢小屋に達したが、本隊の姿はいっこうに見あたらぬ。一時間ほど待っ

ていると、風雨はいっそう強くなり、体は冷えきってしまふ。トランシーパーはいっこうに通じない。まずまず心配になってきて、剣御前小屋に向かう。途中、キスリングを背負った似たようなパーティにいくつが出合い、そのたびに声をかけてみる。とうとう、剣御前まで来てしまった。すると、見なれた顔が休憩しているではないか。久しぶりに見る仲間の顔は、みんな雨でぬがんでいる。やっと今日から、うまい飯が食べると思うと、急に元気になった。彼らのテントを背負って、サポート隊は再び精進地にいくこととなった。

(遠山 隆)

タイム 真砂沢 11・10 | 長次郎 出合 11・45 | 55 | 剣沢 12・55 | 13・55 | 御前小屋 14・50 | 15・00 | 真砂沢 16・10

☆八月五日(日) 曇時々晴

○六峰 C フェース 剣稜会ルート

P 松戸 L 藤井

昨日からの雨が後を引き、出発は八時となった。長次郎雪渓を登るが、入山直後のためか取付へ着くまで

だが、長次郎雪渓の中程で、本隊や A フェース隊と合流。その後全員で雪上訓練を行ない帰幕した。

(松戸 秀亮)

タイム 真砂沢 8・05 | C フェース 取付 10・20 | 40 | C フェースの頭 12・40 | 13・10 | B フェースの頭 13・12 | 14・10 | 五・六の科尔 14・20 | 45 | (雪上訓練) | 真砂沢 16・30

○V 峰 A フェース・熊津高ルート

P 遠山 L 上野

朝は雨が降っており、出遅れて、C フェースの天野、野村パーティと藤井、松戸パーティと共に長次郎雪渓を登る。天候が悪かったためか、A フェースには他のパーティはいない。取付きに着き、準備をしながら、さっそく行動食をパクツイタ。

まず一ピッチ目のシェードルを遠山が取り付く。岩ハダは濡れており、天候もすぐれず一歩気合が入らない。やがて頓念したのがザイルが伸び出した。途中ハーン一本打って、ザイルは伸び切り一ピッチ目は終了した。「いいよ。」の声にセカンドの上野も、息

にフウフウいう始末である。雨の影響か、C フェースには誰もおらず、ゆっくり腹ごしらえと身仕度をする。RC ルートを行く天野パーティと取付で分かれ、藤井トツアで一ピッチ目を開始。ようやく青空が広がり、本峰が北壁を従え堂々と見える。ピッチは順調で、四ピッチ目終了のテラスで小休止をとる。

いよいよ剣稜会ルート名物のリッジ登りである。松戸トツアでリッジ通しに登る。A フェースの頭から遠山パーティが手をふって来る。カントへ移る所でピッチを切り藤井が縮くが、最後の馬の背状で手こずる。結局、藤井はトラパスで確保点へ来て、再び松戸がカラビナ等の回収にもどった。その後は安易なカントを一ピッチで C フェースの頭へ着き、天野パーティを待つ。

しばらくして霧が去来してきた。周囲の眺望もなくなる。天野パーティが遅いので、B フェースの頭へ向かい C フェースを側面から見ると、最高のカメラアングルに天野、野村の両名をとらえた。藤井と世間話をして待たせ、上から天野達が降りて来た。

五・六の科尔で、ちよっとしたアウシテントがあった

を切らしながらザイルに導かれるままに登る。2ピッチ目はそのまま上野がトップになって、カントを必死に登る。天候は回復して、快適な登りであったかどうかはさだかでない。やがて「残り五メートル」の音が下からかかり、2ピッチ目を小さなテラスで切る。3ピッチ目は、ハイマツの混った登りで、遠山がトップ。その後、上野がノコノコひっぱられて、A フェースの頭に二人で立つ。まずは握手をして完了。

あとは、C フェースの剣稜会を物足りなさそうに登る藤井、松戸パーティを見物しながら、残りの行動食をたらいらげる。しばらく休憩後、科尔まで下ることにするが、少シクライムダウンをする。行きづまり、再びザイルを出して一五メートルのアプザイルで下りる。科尔でしばらく待たせたが、C フェースのパーティは現われず、縦走路を登ったりしていたが、やがて本隊が下山を始めた。この科尔があり、熊岩をトラパスして迎えに行ったが、本隊はすでに通過した後ではるか下の方の雪渓横にタム口していた。その後は本隊と同行動。

(上野 忠明)

タイム テント 8・05 | 雪渓途中 8・50 | 9・00 |

Aフェイス取付点10・00→30→Aフェイス頂12・15

○六峰CフェイスRCCルート

P天野し 野村

基部の露岩で準備した後、一旦シュルンドに入って
から岩にとりつきバンドに出る。

アンザイレンして右上へ登ると、隣のルートの松戸
が笑顔で声をかけてくれた。

一度下ってから又登る、という変な事をやったが、
とにかくニピッチでテラスに出て、本隊と交信した。

ここからは三級なのだが、もう一ピッチやらせて下
さい、と天野にねだった。

リッジの左を登りかけたが、上部ががぶり気味なの
で右を登り直した。

二つ目のランニング・ビレイの先はホールドが細か
くなる。無理かな、と思ったが、やはり二歩目で落ち
てしまった。天野ががっちり上めてくれたので二歩、
打撲も無かった。

先の点まで戻ってもう一度ルートを見たが、諦めて
交代した。

天野はここを突破した後、ピチャピチャの遠松帯を
避け、ルートから右へ寄った地点でビレイ。この間の
確保と、半ばザイルに頼ってたどり着いたこのピッチ
は、とても長く感じた。

この後、やや階段状のフェイスから左の凹角に入っ
て遠松でビレイし、天野につるべで稜線まで登っても
らい、再び交信した後、最後のピッチを終了した。

ガスの広ってきた長次郎谷を眺めながら慌しい一本
を立て、待っていてくれた藤井達とコルに下った。

初めての本番だったのにせつかくのチャンスを生か
せなかったし、今回の台宿全段にフアイトが不足して
いた事を反省します。

(野村 民夫)

00
タイム BC 8・05→取付点10・20→40→終了点13
・45→55→五・六コル14・20→45→雪トシに谷流15・

○長次郎谷→本峰

P本隊

朝起きて一瞬停滞かと思われたが、間もなく雨は止
んだ。当初の予定を変更して平蔵谷ではなく長次郎谷

を登ることになったが、慣れない雪渓歩きに随分ヒヤ

ヒヤした。疲れておなかがすいてくる割には遅々とし

て進まず、上を見上げる度にうんざりしてくる。休ん

でも寒いだけなので歩いている方がよい。巖岩を越え

た頃から次第に傾斜がきつくなりズルズルし始めたの

で、今度はアイゼン、ピッケルの二本立でガツガツ登

ることにする。すると結構早く雪渓を抜けた。山頂は

すぐそこだというのもうひと頑張り。何故か×印を
辿って行くと山頂に着いた。天気のせいで眺めが悪く

やや不満。下りは斎藤のみグリセード。他四名はア
イゼンを踏みしめ、さっさと下降。五・六のコルの降

り口で他のパーティーと合流し、滑落停止とグリセー
ドの練習をした。初めてのグリセードは、グリセード
しているより滑落している方が長めだったけど、やは
りとても面白かった。

(鄭 暎恵)

タイム 真砂沢 8・00→9・00→10→9・45→10・

00→熊岩上部10・35→55→アイゼン装着11・30→40→
山頂12・30→13・00→五・六のコルの降り口14・30→
真砂沢16・30

☆八月六日(日) 曇後雷雨

○チンネ中央チムニー

P藤井 福島 上野

○UバンドBフラッフ

P藤井 松戸 上野

近藤岩から見ると三ノ窓は、上部が雲の中に隠れて見
えない。昨日のように晴れてほしいと願いつつ、雪渓
の登りにかかる。取付手前で仙人池への途中の天野た
ちと交信、このままの天候だったら登る事にする。

中央チムニーの取付点へ着くと、僕たちが最初のパ
ーティであった。相変わらず雲がかかって高い山々の景
望はないが、雨の降る様子は全くない。ここで、北条
新村ルートの松戸、遠山と別れる。

上野トップで登攀開始。水滴の流れ落ちる岩場に手
こすり、思ったようになかなか進まない。三人パーテ
イなのでなかなか順番が来ないうちに、他の三パーテ
イが取付点へ集まって来た。やつと番が来て登ってみ
ると、なるほど濡れていて登りにくい。何年か前に一
度登っているが、あれこんなところあったかな、とど
まどうところもある。中間点で確保を交替し、中央パ

ンドまでは落石をきうって思い切りリッジへ出たため
ザイルが岩にとられそうなどころもあった。

すでに登って待っていた松戸、遠山と中央バンドで
合流。休憩しているところへ初めて雷が鳴った。あわ
てて金具をはずし、一時待避。ここでメンバーを交替
し、遠山、福島と、藤井、松戸、上野に分かれてまず
遠山たちがQバンドを登る事にする。雨がポツポツ降
り始めて気があせるが、休憩時に先を越された大岩の
パーティがなかなか進んでくれない。雨がどしゃ降り
になった頃、やっと順番が来る。ルートは滝と化し、
はげしく雷の鳴る、最悪の岩登りとなった。岩場のど
まん中で確保している福島や上野は、雷にさぞ恐怖を
感じている事だろう。

トクラックの途中テラスで確保を松戸に交替、終了
点まで一気に藤井が登り、上野、松戸の順に上げて長
かった登攀をやっと終了する。恐ろしい雷は遠ざかっ
たが、はげしい雨に全員雨具の中で濡らし、寒い。
山頂はすっかり雲の中で視界が全くきかない。数メ
ートル先も見えず、先行パーティの姿をすぐに見失っ
てしまう。踏跡を頼りに下山するが、見失ってしまい

迷路のような岩峰群の間へ入ってしまった。松戸が先行
して道をさがしてくれるが抜ける事が出来ず、もう一
度元の位置へもどる事にする。

後から登ってきた千葉大のパーティに道を救わると
何の事はない、一瞬こじやないかと思っただ一番最初
の道であった。縦走路を登り切って池ノ谷乗越へ出て
下山開始。一八時三五分、やっと本隊と交信がとれた。
皆どんなに心配している事だろう、と思うと申し訳け
ないと共に、五人とも無事にここまで来れた事をあり
がたく思う一瞬であった。

長次郎雪渓へ入って間もなく暗くなり、ヘッドラン
プでの本格的な夜業に入る。昼間にとけた水が凍り、
ところどころガチガチになっている。二〇時一〇分真
砂沢へ到着。心配していてくれた斉藤、天野たちと再
会する。

今回は総て気象の判断を誤ったという反省につぎる
が、雷雨の中で、一五時間にもおよび行動時間にも
拘らず五人とも全くバテる事なく、最後まで体力を減
して行動できた事は幸いであつた。(藤井 諭)

タイム 真砂沢 5・45 | 近藤岩 6・35 | 中央チム二

一取付 10・30 | 登攀開始 11・00 | 中央バンド 14・10 |
登攀終了 16・45 | 池ノ谷乗越 18・20 | 真砂沢 20・10

○チンネ北系・新村ルート

P 松戸 L 遠山

中央チム二取付より少しもどって、階段状を登る
と北系・新村ルートの取付点に着く。松戸トツプで右
のカンテを登る。一〇米ほどで左のクラックに移り、
再びカンテにもどったところでピッチを切る。二ピッ
チ目はカンテからオーバーハングとなり、ここをアプ
ミで左に乗り越す。少々苦しい思いをして、ハングを越
し、凹角に入った所で区切る。後は短いピッチで中央
バンドに達する。

タイム 取付 11・09 | 中央バンド 13・00

○Qバンド | トクラック

P 遠山 福島

雷雨の中を福島トツプで中央バンドをトラバースす
る。前のパーティが詰まっているので、福島はトクラッ
ク直下で身動きできない。体は冷えきってしまう。今
度は遠山がトツプとなってトクラックを登る。クラッ

クに沿って雨水溜のように流れてすべりやすい。右方
カンテに出た所で区切り、福島トツプでチンネの頭
出る。苦しい登りであった。(遠山 隆)

タイム 中央バンド 14・30 | チンネ頭 16・08

○仙人池

P 天野 L 斉藤 野村 長崎 齋 寺田

今朝も又、黒雲の去来するはつきりしない空模様で
ある。

二股までしばらくの河原歩きの後、吊橋を渡り北碓
に入る。雪渓に下りて間もなく、三の窓雪渓を野痕が
走り渡るのを見る。ガした右岸から雪渓上を歩くよう
になるが、かなり状態が悪くそろりそろりと進む。小
窓雪渓が左から入ってくる所で正面の尾根にとりつく。
ここで空を眺めていると、明らかに雲が低くなってき
ているのがわかる。登り始めて間もなく、粟の定雨が
降り出し、雨具着用となる。しかし、この雨も皆が天
を睨んでいるうちに小やみになった。この先一〇分程
であっけなく平の池の畔に出る。対岸に天幕が一張あ
るだけでひっそりと静まりかえっている。岫々とした

風貌の男性的な剣の山中にあって、この雨上がりの中の池はやわらかな緑に包まれ、実におちついて穏やかな顔をしている。高山植物の本をとり出し、ひとつひとつ花を見比べながら、のんびりと池の平小屋へと向かう。雲にかくれたチンネのあたりを眺め、ここにいるはずの人と交信をした後、仙人池へと歩を進める。このころより、しだいに雲も上がってきてしばしば歩を止め、ハツ峰の雄姿に眺め入る。仙人峠では後立山の大展望を得、又ハツ峰方面の展望もこれが最後と五分、棄しむ。峠から仙人池へと下りてみると、こちらはいーゼルを立てている人や何やらでかなりにぎやかだ。ハツ峰を映し出すというこの池も今日はいかにただの小さな緑色の池にすぎず、前評判が高かっただけに少々がっかりさせられる。ここで小屋の荷上げの為のヘリコプターの出現に、皆ザックを持って右往左往させられるが、この時ならぬ嵐の去った後、記念撮影をし、下山となる。仙人峠から陽射しの強くなった仙人新道を一気に下り、二股に戻る。二時少し前、ロッジのすぐ下の雪渓上で最初の雷鳴を聞くが、幸いまだ青空のあるうちに帰幕し、天幕を乾いた場所に移

動させ、チンネへ行った五人の戻るのを待った。

(寺田 勝代)

タイム BC 6・00―二股 6・40―7・00―尾根取り付 8・05―20―平の池 8・50―9・00―池の平小屋 9・15―40―仙人池 10・45―11・25―仙人峠 11・35―50―二股 12・45―13・05―13・35―45―BC 14・10

☆八月七日 曇時々晴一時にわか雨

○雪上トレーニング

□本隊

夜半からの雨が少し小降りになったところで、藤井・福島の下山準備を手伝い、二名の下山を見送る。

本隊は九時三〇分まで停滞としてゆっくりしているうち雨が上がり時々日がさして来た。天気図を見るとまだ前線は通過していなかったが、太陽の顔を見るとじっとしておれなくなり六峰へ行くことにして出発した。しかしやはり天気はあまり良くなく六峰はガスの中にあり、そのガスも昇ったり降りたりしていた。

雨が気になるので六峰をやめ長次郎の出合付近でちよっとした岩トシ、雪上トレーニングを行なった。

一時間半ほどのトレーニングの後、天野の7降って来そうだし、声で全員すぐ帰幕にかかった。天幕に着いて荷物をとっていると降り出しはじめ、ぬれずにはなだことにほっとした。

(斉藤 正吉)

タイム 真砂沢 10・15―長次郎出合 11・00―12・40

―真砂沢 13・00

○真砂沢幕営地―黒四ダム

□藤井・福島

藤井・福島の二名は本隊より一日早く下山する。

朝は雨が残っていたが、歩き出すとすぐにやみ、ピッチ目で両員を脱ぐ。ハシゴ谷乗越への登りから振り返ると、ハ峰マイナーズラブが印象的だ。上部はガスがひかかっており、ハ峰縦走の予定の本隊はどうしているか気がかりだ。

福島は連日の靴をぬらしての行動に、足がマメだらけであり、痛くてたまらない。藤井には悪いが、ノタリノタリと下降させてもらう。

内蔵ノ助平の小沢で休をかくと、いかにも下山の気分。長い内蔵ノ助谷沿いの下りも、やがて黒部本流と

合し、丸山東壁のオーバーハンクをめぐらした姿に見とれる。

やっと出ました、黒四ダムはすごい放水。水しぶきに涼しい思いをして、対岸のジグザグ登りに一汗かきダム上に着いたら、なんともう午後二時であった。

(福島 功夫)

タイム 幕営地 7・45―ハシゴ谷乗越 9・30―内蔵ノ助平 10・25―50―黒四ダム 14・07

☆八月八日 快晴

○下山 真砂沢―黒四ダム

両首に目覚めてばかりいた昨日までと違って、今日は寒さに身を震わせての起床である。大快晴、雲量零の青空が眼前に広がっている。好天をよそに、我々は朝食後さっそく旅取にかかった。食料が減ったものの背中のキスリングは何故か重たく感じられる。ハシゴ谷乗越で最後の姿を見せる剣に別れを惜しみ、あとはひたすら黒四ダムを目指して歩くのみ。

「山よさよなら、ごきげんよろしゅう……」剣のあの歌は、多分山に行く度雨に降られている収が創った

のに違いない。

若い男女や家族連れのみ只中へ汗臭い連中はやっと
辿り着いたのであります。(長崎 米)

タイム 真砂沢 6・00ー6・50ー7・00ーハシゴ谷
乗越 7・45ー8・00ー内蔵助平橋 9・13ー35ー丸山東
壁直下 10・45ー11・00ーダム下 12・10ー25ーバスター
ミナル 13・10

☆登山台宿共同装備

品名	数量	内偵察隊用
天幕 6人天	1	
ッ ゴア天	1	
ツエルト	4	1
コッフェル(大セット)	1	
ッ (小セット)	1	1
ラジウス	4	1
石油	7ℓ	1ℓ
コンロ台	4	1
まな板	4	1
タワン	2	

クレンジー	1
ロールペーパー	4
ロートク	5本
スコップ	1
ザイル 11mm	3
9mm	2
トランシーパー	2
ラジオ	2
医薬品	1式
温度計	1
修理具	1式
赤布	0
焼あみ	2
予備電池(トランシーパー) 2セット	1セット

☆食料計画

8/1 朝食・各自
行動食・各自
夕食・焼魚(塩鮭3、つけもの2、イネスタン
トみそ汁3、米2合)

8/2 朝食・チャーハン(コンビーフ1缶、玉ネギ1/2
米2合、つけもの1/2)
行動食・④
夕食・カレーライス(ホンカレール、ワンタン
チライス3、つけもの1/2)

8/6 朝食・みりん干2袋、ウズラ豆2袋、つけもの2
ワカメのみそ汁、米8合
行動食・⑤
夕食・みそ焼肉(肉500g)、焼なす(なす11、
米9合、つけもの2)

8/3 朝食・うどん(うどん3、玉ネギ1/2、つけもの1/2)
行動食・⑤
夕食・おじや(白米2、ベーコン1袋、つけも
の1/2)

8/7 朝食・雑炊(雑缶2、白米、つけもの2)
行動食・④
夕食・おじや(肉100g、ワカメ1/2袋、切干大根
1袋)、めざし9、米7合、つけもの

8/4 朝食・スパゲティ(スパゲティ3、つけもの1/2)
本隊は各自
行動食・⑤、本隊は各自
夕食・野菜煮込(キャベツ1/2、人参2、大根1/2、
肉500g、米8合、つけもの2)

8/8 朝食・カうどん(うどん9、もち9、コンソメ、
ベーコン30g、つけもの)

8/5 朝食・煮込うどん(うどん8、もち11、キャベ
ツ1/2、大根1/2、肉100g、つけもの2)、
酢の物(きゅうり3、ワカメ1袋)

※行動食④・フランスパン1/2、レーズン30粒、ステイ
ックチーズ1、チョコレート1、アメ5
塩クッキー5枚、まぐろの珍味5
⑤・月餅1、オールドレーズン1/2、煎餅5、ス
ティックソーセージ1、ピリー5、梅干
塩タラ、ピーナッツ

行動食・④
夕食・シチュー(ベーコン500g、じゃが芋3、
人参2、玉ネギ2、米9合)

調味料・塩、醤油、砂糖、コンソメ、酢、コンソメ、
バター

嗜好品・コーヒー、紅茶、緑茶、スキムミルク、粉汁
 ユース、気付薬
 予備食・ラーメン11

☆食糧反省省

特に気が付いた点をあげると、1行動食の量が足りなかった。2テント別に調理する場合、食事別テント別にパックしておいた方が、スムーズにできる。3肉を醤油で煮たり、味噌漬を持って行くのはよいが、調理に工夫すれば、もっとおいしく食べられる。4パックキングについて行動食など形が崩れると食べにくいものなどは、箱に入れて行くなどの工夫が欲しい。5ゴミの出ない工夫が欲しい。
 (上野 忠明)

夏山合宿反省会

八月一八日夜 於OMCヒュッテ

(行動について)

○岩登りでは、下降ルートの研究が不十分であった。
 ○行動の変更はあったが、雨の多い天候の中で三分の

- 準備会までに返却されていない装備が多く、困った。
- コンロのメタ皿がら火がもれていた。
- 石油は、7リットル持っていき、2.5リットル余った。
- ロールペーパーは、真砂沢天幕場では二本で十分。
- ゴアテックステントは、フライが必要である。
- クレンザーは、持って行ってよかった。
- ラジオは、もっと性能の良いものを使いたい。
- 個人装備の量をもっと考えて、制限した方がよかった。
- 懐電予備電池は、夏合宿ならば、本体の他にニセックあれば良いだろう。
- 【食糧について】
- 行動食は、主食的なものをもっと増やしてほしい。
- テントごと、日付ごとなど、もう少し考えて計画を立ててほしいかった。
- 準備会当日のパックは、もっとち密にやりたかった。
- 【その他】
- テント内の整頓をもっと注意して実行したい。
- 行動前後の体操等をもっときちんとしてほしいと思う。

(記録・天野)

昭和54年度夏山合宿会計報告

合宿費は、装備費、食料費、幕営料とし、交通費は含んでいません。

収支報告

収入	
合宿費	4100×11(人分)=45,100.-
支出	
幕営準備会時支出	28,456.-
入山時各自購入分	13,115.-
真砂沢幕営料	3,300.-
	44,871.-
収支	45,100-44,871=229.-

なお、最終日に下山した9名から乗金したトrolleyバスの尚物代の残金40円と合宿費の残金、229円の合計額269円をヒュッテ会計へお附いたします。
 (松戸秀亮)

二は消化しているので、わりと登ったと言える。
 ○別々のパーティーになったら、全く別のパーティーとして行動した方がよいだろう。どこで合流するうんぬんは、避けるべきだ。
 ○岩登りでの三人パーティーは、さしひかえた方が良いだろう。
 (装備について)

○偵察報告 (8/1)

時間的に余裕がなく、十分な偵察はできなかったが、取付点の概略は知ることができた。西稜取付点は縦走路からの下降尾根末端のちょうど対岸にあり、南沢の分岐点でもある。付近の川幅は約30m、水量はかなり多い。西稜末端は20mぐらいの垂壁となっており、一般登山路もそれを高巻いている。西稜に向かっていると、まず右側から取り付いてみる。急なはしごがかけてあり、上部は岩が出て、積雪期は相当に困難と思われる。左側からの取り付きもかなり急であるが、右側ほどではない。尾根上に出ると、甲山が付けたらしい赤布があり、ここから約100m、西稜を登ってみる。尾根ははつきりしており、ヤブもそれほどひどくない。上部に行くこと、シヤクナゲに悩まされるが、人の通った跡を認めることもできる。途中、天幕一張程度の幕営適地をみつけた。これで偵察を打ち切り、南沢出合の幕営地にもどった。

(遠山 隆)